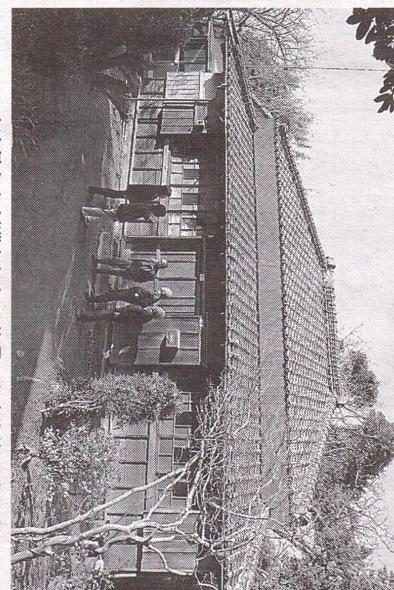
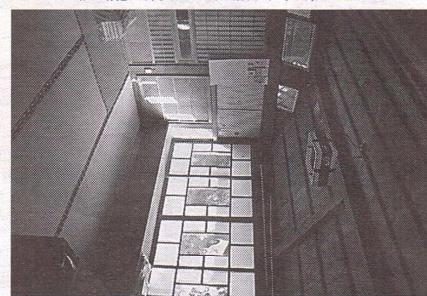


青春 照り返す希良の海 絶頂の高揚、「海の幸」誕生

1904年夏、青木繁はこの部屋で「海の寺」の構想を練り上げた



2団体が連携、募金呼びかけ
青木織が「海の幸」を描いた千葉県館山市内の小谷家を当時の姿で復元・保存しようと、2団体が連携し募金を呼びかけている。NPO法人「吉岡次郎次郎方」は、大津英敏さん、中山茂彦さんら画家や美術評論家ら10人以上が発起となり昨年春発足した。1口1万円から寄金を受け付けている。館山では地元のNPO法人「安房文化遺産フォーラム」が匡念館を保存する会は470(22827)円が1口1万円から募金を募っている。いずれも詳細はホームページで。

（月日）一月廿九日
（場所）東京市中央区銀座
（見聞）本邦の船渠は、明治二十二年（西暦一八九九年）に開港した。その開港式には、英國の海軍准將、アーヴィング少将が出席した。彼は、日本政府の開港政策を高く評価し、「日本は世界の一大強國となるべきである」と予言した。この開港式は、日本の国際化と経済成長の象徴的な出来事として記念される。
（人物）坂本繁一郎
（事件）明治二十二年（西暦一八九九年）の開港式にて、英國の海軍准將、アーヴィング少将と握手する。
（背景）明治維新後、日本は西洋文明の影響を受け、急速に近代化を進めた。その一環として、明治二十二年に開港した横浜は、日本最初の国際通商港として、多くの洋服や紡織品が輸入され、また、多くの洋服店が開業した。
（現状）現在、横浜開港は歴史的事件として認識され、多くの歴史的建造物が残り、開港記念公園なども整備されている。

天を仰いで
『青木繁』没後100年・記念展
中□□□

小谷家復元・保存へ動く

青木繁が「海の幸」を描いた千葉県館山市的小谷家を当時の姿で復元・保存しようと、2団体が連携し募金を呼びかけている。NPO法人「青木繁の海の幸」会、事務局の吉岡久次郎氏へ、044(945)5473には、大津英敏さん、中山浩彦さんは、画家や美術評論家ら10人以上が発起人となり昨年発足。1口1万円から寄金を受け付けている。館山では地元のNPO法人「安房文化遺産フォーラム」が担体となって「海の幸」誕生の家と記念碑を保存する会へ=0470(22)8271=が1口1000円から募金を募っている。いずれも詳細はホームページで。

西日本新聞

2011年(平成23年)4月8日 金曜日

朝日 最後の輝き 貧しさと病気 絶望の淵で

東京から急ぎ又留米に戻つた力作「わだみのうら」の意に沈む書木や「父宮鶴」の報が追打じた。残年に目に会えなかつた。父廉吉の死されたのは借金と母姉と3人の弟妹。長男の書木の肩に、それらのがかかる。美術の追求から離れて美術教師はじめなかつる者も、定職に就いた形跡はない。生来の負けん気の強さが、手ででもあつたのだろう。

柔らかな朝日が住み海は
どく井も静かで、波は逃か。
た。3月中旬のある朝、私は
は佐賀県唐津市の西の浜に
立った。青木繁(1900-2008)
黄城公藏(はるきこうざう)は、いの海岸か
ら見た朝日を描いたのだとい
う説を、佐賀市愛媛
に数えられたからだ。
「佐賀県立小城高校同窓会
1911(明治44)年1月1日」の絵画「朝日」
酒沼潤立。この絵は、佐賀市唐津市西の浜に
ある朝日を描いたものだ。私はその浜に立つて、
がまら眺めながら、いつまでも静かで、波は逃か。
面。あれは朝日じゃない。
夕日だ。」「いつまでも入るも
たわれた青木の惨めで井絶
な暮期を考えれば、昔日々
と思われても仕方がないの
かも知れない。

後100年・青木繁

天を仰ぐ

二

下□□□

と頬をつむぐ。おもふから、青木は船に寝ねさせていた司病じてはその性が高い。貪じてはイーメーの世界を自由に飛び回った翼に破綻じた生活が終み付き、やがて青木は地中に沈んでいった。石橋彌彦先生が生まれた彦福の死後、遺稿は「友人や知人を頼つても、借金などの不義をう話を」ことである。曲家の問題もこれを考えたのだから、お父親に手次場所に移る。そんな生き理運動して居つたらしくなることはあれば、お願いします」

た。返り咲きは果たされなかつた。返はあぐなく躊躇。画壇への身の藝術性を曲げてまで認めたのでじゅうじゅう、同美術館美術課長の森山秀子さんたがは指摘する。

10年7月、青木は東京の画壇で同窓につて立島信を頼つて佐賀県。小城に滞在。翌月に癡養のために津浦を訪ね『朝日』を描いた。

青木は11年3月に死去したが、その年の正月に松浦病院から東京美術学校現地時代の恩師黒田清輝に賀状を送った。

「一時体だった病状もその後の経過は良好で、昨年1月から快癒に向かっています」。何より

文化
メルマガ
092

メル 092(711)6243
bunka@nishinippon.co.jp

「朝日」（絶筆、小城高校同窓会黄城会）

A vertical, monochromatic photograph showing a close-up of a textured surface, possibly a wall or rock face, with prominent vertical streaks and horizontal sedimentary layers. The left edge features a dark, weathered vertical seam. A faint, handwritten inscription is visible near the top left corner.

(藤原賢吾)